

コミュニケーション・意味・意図

(書評：柏端達也 (2016)『コミュニケーションの哲学入門』 (慶應義塾大学出版会, 105 頁))*

三木那由他

Abstract

柏端の『コミュニケーションの哲学入門』は単なる入門書ではなく、大きく四つの積極的な主張を含む野心的な著作である。すなわち、1. コミュニケーションとは「メッセージ」を送る行為である、2. コミュニケーションに言語使用は必要でも十分でもない、3. コミュニケーションの核となる行為は独特な自己言及的要素を持つ意図を伴った行為として分析される、4. コミュニケーションには思考の言語も必要ではない、というのが柏端の打ち出す見解だ。とりわけ本書の独創性が見られるのは、非自然的意味（話し手の意味）の分析において自己言及的意図を持ち出す立場へのサポートとして柏端が展開する議論である。柏端はそこで、心的態度そのものと文による心的態度の記述とを峻別するという見解に基づき、自己言及的意図への依拠を無害化しようと試みているのである。本稿では柏端の議論を要約、補足するとともに、柏端の主張に対して四つの批判を試みる。ここで提起する論点は1. コミュニケーションという現象は柏端の特徴づけ通りに画定できるのか、2. コミュニケーションの成立時に起きていることを柏端は十分に捉えているのか、3. 柏端の利用する「メッセージ」という概念の特徴づけは十分に正当化されているのか、4. 心的態度に対する柏端独自の見解は柏端の分析を十分にサポートできているのかである。本稿ではそのすべてに否定的に答える。

Keywords 『コミュニケーションの哲学入門』, コミュニケーション, 意味, グライス, 意図基盤
意味論

1 はじめに

人間同士の会話を典型例とするコミュニケーションという営みは、私たちの日常にあふれており、もはやそれなしの生活など考えられない。こうした営みを分析哲学の枠内で取り上げた代表的な哲学者がグライスの哲学である。しかしグライスの哲学を日本語で紹介する文献は少なく、入門的なものとなるとなおさらである。そうした状況で登場した柏端の『コミュニケーションの哲学入門』は、100 頁程度のコンパクトさでありながら、コミュニケーションという営みの特徴づけ、コミュニケーションと言語の関係の探求、そしてグライスによる意味の分析の紹介と改良とを試み、しかも目新しい独自

* CAP Vol. 9 (2017-2018) pp. 33-65. 受理日: 2017.01.21 採用日: 2017.07.16 採用カテゴリ: 書評 掲載日: 2017.07.31

の見解さえ提示するという豊かな内容を持った著作となっている（以下、「本書」によって指されているのはこの著作である）。そしてそうした豊かさゆえに、本書はそのタイトルにおいて「入門」を謳っているにもかかわらず、単なる入門書として素通りするのではなく、その論点を整理し、検討するに値する。

本稿は『コミュニケーションの哲学入門』の書評である^{*1}。その眼目は二点である。第一に、本書で提示されている柏端の見解を整理することで、グライスやその後継者にあたる論者たちには見られない柏端独自のアイデアを明らかにしたい。後に見るように、柏端の独自性はとりわけ第三章においてグライスによる意味の分析と心的態度についての独自の見解を接続している点にある。すなわち柏端は、意図による意味の分析というアイデアと、意図そのものと文によるその記述とを峻別するという見解とを組み合わせているのである。私の知る限り、グライスの意味の分析において、意図という概念に対してそうしたスタンスが提案されたことはない（あったとしても珍しい）。そこで第二の眼目として、そうした独自のアイデアを含む柏端の見解を批判的に検討したい。

本稿で指摘するのは大きく四つの点である。第一点として、コミュニケーションという現象の柏端による特徴づけの適切さに関して疑問を述べる。この疑問は、柏端の議論がその分析対象を適切な仕方で切り出せているのかということに関わる。第二に、コミュニケーションが成立したときに何が起きるのかということを柏端が十分に捉えられているのかということを問う。後に見るようにコミュニケーションについての柏端の分析は、コミュニケーションの成功時に生じることをその分析からの帰結として説明しようと試みる形で展開される。すなわちコミュニケーションの成功において生じることが、柏端の分析の説明目標のひとつとなっている。それゆえ第二の疑問は、柏端の分析の目標設定は適切であるのかと問いかけるものとなる。第三の疑問点は、柏端が自身の分析の足掛かりとする「メッセージ」という概念についてのものだ。柏端は「メッセージ」がコミュニケーションの中核にあり、そして「メッセージ」という概念が特殊な自己言及的意図によって特徴づけられるということ論じることで、意図による意味の分析という意図基盤意味論 (intention-based semantics) の基本的視座を導入する。だが、「メッセージ」という概念の柏端による特徴づけは十分な正当性を持っているのだろうか？ 第四に、心的態度に対する柏端独自の見解が柏端の分析をサポートできているのかを疑問視する。本稿ではこれらの批判を柏端の議論との関係のもとで展開するが、これらは意図基盤意味論の論者全般に問いかけられるべきものである。

2 『コミュニケーションの哲学入門』 概要

本書は四つの章に分けられており、それぞれ以下のように題されている。

1. 「何がコミュニケーションに含まれるのか」
2. 「言語はそれほど必要ないかもしれない」
3. 「『意味』といわゆるメタメッセージ」

^{*1} 本書評では、『コミュニケーションの哲学入門』への言及においては該当頁のみを記している。その他の文献に言及する際には標準的な体裁に従う。

4. 「言語の居場所はどこにあるのだろうか」

まずは各章の主要な内容とそれらのあいだの関係を確認しよう。第一章では本書で取り上げるコミュニケーションなる現象について、出発点となる特徴づけが与えられている。この章では、本書の議論の主題が提示され、その主題に直観的な仕方で接近することで、全体の議論の下準備がなされている。第二章では言語とコミュニケーションの関係を問うことで、コミュニケーションというものの理解がさらに深められている。そこで論じられているのは、コミュニケーションには言語使用が不可欠ではなく、また逆に言語を使用したからといってコミュニケーションが成り立つわけでもないということである。つまりコミュニケーションにとって言語の使用は必要でも十分でもないというのが柏端の主張だ。本書の主要部をなしていると言えるのは第三章である。この章ではそれまでの二章におけるコミュニケーション理解をもとに、グライスによる非自然的意味の分析がコミュニケーションの核を捉えるものであることが論じられ、グライスの分析を改良することでコミュニケーションの分析が提案されている。この分析は、心的態度についての柏端独自の見解に基づいて擁護されている。第四章では、第二章で取り上げられた外的な言語だけでなく、内的な、いわゆる「思考の言語」さえコミュニケーションには不可欠ではないと論じられる。

こうした全体の構図を念頭に置きつつ、各章の議論をさらに詳しく見ていこう。ここでは次節で取り上げる批判点を詳細に展開することはせず、柏端自身の論述に関する補足を付すに留める。

2.1 コミュニケーションとは「メッセージ」を送る行為である

第一章では具体例の検討を中心に、本書で考察するコミュニケーションなる現象の前理論的な把握が試みられている。具体的に挙げられている事例は次の三つである。

第一例 「彼女の誕生日の朝、玄関にトルコキキョウを置いておこう。出ていくときに彼女はそれに気づくだろう。花言葉は「永遠の愛」だ。[……] その人物は自分の愛する人に「メッセージ」を送ろうとしているのだ。」(7 頁)

第二例 「あなたはスーパーマーケットの店長である。チョコレート菓子の売り上げをあとすこし伸ばしたい。あなたは、レジを待つ客の司会にさりげなく入るような場所に、包装のきれいなチョコレートを並べることに決める。」(同上)

第三例 「排水溝から海水が入ってくる。このあたりの海域の波の高さを過小評価していたようだ。逆流させないためには、海へと続く排水管のどこかに弁を取り付けなければならないだろう。しかしどこにそんなものを取り付けられるだろうか。」(7-8 頁)

柏端の判断によると、これらは「いずれも行為に関わっている」(8 頁) が、『コミュニケーション』が明白に関わるのは最初の例のみである」(8-9 頁)。それゆえ、最初の例が持ち、ほかの例にはない特徴を見定めることで、柏端は本書で扱うコミュニケーションなる現象の範囲を画定しようとする。

柏端によるコミュニケーションの特徴づけを端的にまとめるなら、コミュニケーションとは「メッセージを送るという行為」(23 頁) であるということになる。柏端の考えでは、第三の例がコミュニ

ケーションから排除されるのは、「最初の二つは他者を相手にしたもの」(11 頁), すなわち「他人の心を変えることが意図されている」(同上) 行為であるのに対し、「第三の例のような行為は、極端な話、自分以外の心を認識しない知的存在者によっても遂行可能であろう」(12 頁) からである。すなわち、他者の心を変えようという意図の関与がコミュニケーションにとって少なくとも必要であると柏端は主張している。さらに第一の例と第二の例の区別は「メッセージ」という概念によって与えられている^{*2}。すなわち、「第一の例に登場し第二の例に登場しないものは『メッセージ』である。メッセージとは、メッセージであることに気づかれる必要があるような何かである」(14 頁)。こうして第一の例の顕著な特徴として、それが他者の心理に向けられた行為であり、それだけでなくその行為は「メッセージ」を介して他者の心に向けられているということが確認される。さらに柏端は「メッセージ」が「まさにいま説明しているような意図内容をもつ」(13 頁), 「その内容に自己指示的な部分を含む」(同上) ものであることを指摘し、「メッセージ」を送るという行為は「特有の重層的構造をもつ意図によって特徴づけられる」(23 頁) と主張する。これによって柏端の議論は、後に論じられるグライスによる非自然的意味の分析と接続されることとなる。

本書の第一章の主要な論点は以上のようなものだ。第一章における柏端の主張は明確である。すなわち、コミュニケーションとは「メッセージ」を送る行為であり、そして「メッセージ」は特有の構造を持った意図によって特徴づけられるということである。「メッセージ」という概念の特徴づけについては、本稿が提示する第三の疑問点として、後に詳しく論じる。

2.2 コミュニケーションに言語使用は必要でも十分でもない

柏端は第一章で「メッセージ」という概念を導入し、これを意図という概念によって特徴づけていた。この際に柏端は「メッセージ」が「言葉である必要がな」(12 頁) く、「慣習に結びつけられている必要すらな」(同上) いと指摘している。柏端の考えでは、「メッセージ」はもっぱら意図と関係し、言語や慣習とは本質的には結びついていないのである。さらに「メッセージ」を送る行為こそがコミュニケーションなのであった。そうすると、言語や慣習とコミュニケーションは本質的に結びついていないという見解が帰結することになる。だが言語は本当にコミュニケーションに不要なのだろうか？ 第二章はこのテーマを取り上げており、柏端はコミュニケーションにとっての言語の必要性を退けている。それだけでなく、柏端はさらにコミュニケーションにとって言語使用は十分でもないと主張する。

コミュニケーションと言語の関係といった問題を考えるには、言語の定義をはっきりさせることが必須だ。柏端の議論における言語とは、「ある特徴的な内部構造をもつ記号列」(31 頁) である。第二章ではこれ以上の記述は見られないが、第四章では言語を分節性、反復性、合成性、体系性という四つの特徴によって捉えているため、ここで第四章の特徴づけを紹介しておきたい。分節性は記号が「離散的」(78 頁) であることとも言い換えられている。すなわち、記号の切れ目がはっきりしているということだ。反復性は「複数個所で特徴的な反復が見られる」(同上) こととされ、「反復する部分

^{*2} 柏端は「メッセージ」に特有の分析を施している。そのため日常的な言葉と区別し、括弧つきでテクニカル・タームとして扱う。ただし引用文中での表記はもとの表記に従っている。

を単位として取り出すことにより、全体をとりあえず節目で切り分けられるようになる」(同上)と述べられている。要するに反復されるパターンがあるということであると理解できる。だがもちろんこれだけでは言語には不十分であり、合成性、体系性という意味論的な特徴が言語には必要となる。合成性は「言語表現の部分の意味がその言語表現全体の意味を決める形になっているという特徴」(80頁)である。最後の特徴である体系性は「言語表現の一部を他の表現に置き換えることにより、別の事柄を意味する新たな表現の全体を手にしうという特徴」(同上)とされる。こうした四つの特徴を持つものが柏端の語る言語である*3。

こうして特徴づけられた言語がコミュニケーションに必要でないということを、柏端は再びトルコキキョウの例を挙げて説明する。トルコキキョウの例において、「花そのものは『言語』と呼ぶにふさわしい構造を持っていない」(p. 30)。それゆえ柏端はトルコキキョウは「記号化された信号ではまったくない。花が一定の構造をもつにもかかわらずである」と結論する(34頁)。それゆえ、トルコキキョウの例でコミュニケーションが成り立つならば、コミュニケーションに言語は不要である。

さらに柏端は、言語を用いたからといってコミュニケーションとなるとは限らないと論じる。それを示す例として最初に挙がっているのは「特定の単語を混ぜ込むことによって、あるいは話し方の順番を工夫することによって、何らかの印象を抱くように人を仕向けるといったこと」(37頁)である。さらにコミュニケーションとならない言語使用の例として、「嘘をつくこと」(同上)、「フィクションを語ること」(38頁)、「それ自体が賭けをすることであるような『僕は雨が降るほうに賭ける』という発言」(40頁)が指摘されている。とりわけ賭けの例から柏端は「コミュニケーションは、言語的な行為のさまざまなタイプのうちのあくまで一つにすぎない」(同上)と結論する。これらの例がコミュニケーションでないならば、言語使用はコミュニケーションにとって十分でもないということになる。

これらの柏端の論述について、大きく二点の指摘をしておく。第一点はコミュニケーションにとって言語が必要でないという主張に、第二点は十分でないという主張に関わる。

まず花の例を用いてコミュニケーションにとっての言語の必要性を否定する議論に関連して、柏端が飛躍した主張をしている点を指摘する。確かに花だろうが身ぶりだろうが私たちは言語的な構構性を持たない手段によってコミュニケーションを取ることができる。このことは柏端が論じている通りであり、またそれゆえに柏端の導く結論も正しい。だが柏端は議論の過程で行き過ぎた主張をお

*3 柏端の言語の定義では統語論、とりわけその核とされる再帰性という特徴には目が向けられていない。それゆえ柏端自身は「『言語』というものを私は狭くとらえすぎていると言われるかもしれない」(31頁)と懸念を表明しているが、「狭くとらえすぎている」どころか、言語進化論のような分野での理解に比べると「言語」というものを広く捉えすぎているとさえ言える。実際、現在の言語進化論の議論の出発点と目される Hauser *et al.* (2002) では探求の対象となる狭義の言語能力 (faculty of language in narrow sense, FLN) について、その核となる性質は再帰性であると明言されている (p. 1571)。また再帰性への言及が欠けているため、柏端の定義する言語は、無限に多くの文を持つ必要もない。ただし合成性と体系性は表現が持つ構構性に基づく特徴であるため、柏端が特徴づける言語も、単純な表現を組み合わせることで複雑な表現を形成するという限りでの統語論的な構構性については有する必要がある。またこれに関連して、合成性に関する柏端の説明も標準的な説明に比べるとルーズであり、厳密さを求めるなら「言語表現の部分の意味と統語論的構構がその言語表現全体の意味を決める」と言い直すべきだろう。「牛のご飯」と「ご飯の牛」では含まれる表現は「牛」、「の」、「ご飯」で共通しているが、だからといってこの両者が同じ意味になるような体系では私たちの知る言語には足りない。実際、日本語では「牛のご飯」は牛の餌を指すのに使えるが、「ご飯の牛」が自然な解釈のもとで指しているのは食事に出てきた牛料理であろう。複合的な表現の意味の決定は、それを構成する表現の意味だけでなく、そのの統語論的構構を反映してなされなければならない。

こなっている。すなわち、トルコキキョウが「記号化された信号ではまったくない」という主張である(34頁)。これは「記号化された信号」を何であれ記号として用いられるようなものとして額面通りに理解する限り、単に第二章の目標を超えた主張であるだけでなく、議論の飛躍でもある。柏端が示したのはトルコキキョウが言語的構造を持っていないというだけであり、構造は持たないが記号化された信号として用いられているという可能性は退けられていない。第三章で取り上げられるグライスは、記号化された信号であることは必ずしも言語的構造を持つことを含意しないと考えていた。グライスは規約的に意味の定まる信号や文のようなものを「発話タイプ (utterance-type)」と呼び、発話タイプが特定の文脈に依存せずに持つ意味を「無時間的意味 (timeless meaning)」と呼ぶ (Grice 1968, p. 119, 邦訳 182 頁)。そして発話タイプの無時間的意味を分析する際に、ジェスチャーのような「無構造の (unstructured)」発話タイプの分析をおこなってから、その特殊事例として文のような「構造を持つ (structured)」発話タイプを分析する (Grice 1968, pp. 124-137, 邦訳 190-211 頁)。グライスにおける構造を持つ発話タイプとは文にほかならず、ここで言われている「構造」は柏端の注目する言語的構造と一致する。そして無構造の発話タイプと構造を持つ発話タイプを区別するときには前提とされているのは、構造を持っていないからといって、無時間的意味を持つ発話タイプ（これは「記号化された信号」を上記のように理解する限り、記号化された信号と変わらないだろう）でないとは限らないということである。柏端はグライスの言葉を使えば、トルコキキョウが構造化された発話タイプではないということから、そもそも発話タイプにさえなっていないということを結論していることになるのである。だがこれは妥当な推論ではない。柏端の議論によって言えるのはあくまでトルコキキョウには言語的構造がないということ、それゆえコミュニケーションに言語的構造は必要ではないということだけであり、トルコキキョウが記号化された信号ではないということや、コミュニケーションに記号化された信号が必要ないということではない（そして第二章の目標を達成するためにそこまで主張する必要はない）。

第二の点に関しても結論に異論はない。言語表現を用いた心理誘導の例からも言語使用が必ずしもコミュニケーションとならないということは確かだろう。また単にデザインとして英字新聞のような模様を商品に用いる場合なども同様の例となるだろう。ただ問題は、嘘やフィクション、そして何かを賭けるといった言語行為がコミュニケーションとならないという主張である。そうした事例に関して第一に気になるのは、コミュニケーションは結局どのような言語行為なのかということだ。賭けのような言語行為についてグライスは言及していないものの、グライスの分析は少なくとも主張、命令という複数の言語行為を包括するものとして与えられている (Grice 1968, pp. 118-119, 邦訳 181-182 頁)。柏端自身もこのことには気づいており、グライスの分析は「幅広いタイプの言語行為を覆う」(49 頁) ものであり、「事実の報告や記述となされるコミュニケーションだけでなく、依頼や命令、警告、質問といったさまざまなタイプのコミュニケーション的行為をも、それは適切に特徴づけることができる」(49-50 頁) と述べている。だがそうすると、賭けのような言語行為は排除し、「言語的な行為のさまざまなタイプのうちのあくまで一つにすぎ」(40 頁) ないが、しかし報告、記述、依頼、命令、警告、質問といった言語行為を包括するコミュニケーションとは、結局のところどういった言語行為なのだろうか？ こうした事態は、柏端が「コミュニケーション」で何を指しているのかを不明確にさせる。またフィクションを語ることや嘘をコミュニケーションから排除すると

いうことについても問題がある。この点については次節で論じる。

とはいえ、すでに述べたようにこれらの疑問点は柏端が第二章で到達する結論、すなわち言語がコミュニケーションに必要でも十分でもないということを否定するものではない。ただしトルコキョウの例に関してもすでに述べたように、この結論が正しかったとしても柏端の議論はあくまで言語に関するものであり、非言語的なものを含む慣習や規約について同様のことが論証されているわけではない。それゆえこの章の結論は、コミュニケーションの本質を慣習や規約に依拠することなく自己言及的な意図によって捉えようという柏端の試みを必ずしも正当化するわけではない。

2.3 コミュニケーションの本質は自己言及的な意図によって捉えられる

第三章は本書の中心的な章となっている。第一章ではコミュニケーションが「メッセージ」を送る行為であるということが論じられ、第二章ではそのようなコミュニケーションにとって言語の使用が必要でも十分でもないということが論じられた。ではいったいコミュニケーションとはいかなる行為なのか。これに答えるのがこの第三章となっている。

第三章の鍵となる柏端の主張は二つである。一つ目は、グライスによる非自然的意味 (non-natural meaning) の分析を改良したものがコミュニケーションの本質を捉えるという主張である。そしてその分析には自己言及的な意図というものが登場する。これに関して柏端はさらに、自己言及的要素を含むそうした意図を持ち出すことが分析にとって無害であるということを主張している。より紙幅が割かれているのは第一の主張であるが、柏端の独創性が見られるのは第二の主張だ。以下で順に見ていこう。

まず柏端はグライスによる自然的意味 (natural meaning) と非自然的意味の区別 (Grice 1957) を紹介する。柏端は自然的意味の例として赤い頬がリンゴ病の罹患を意味するといった例や頻繁なまばたきが嘘をついていることを意味するといった事例を挙げ、こうした自然的意味は「すくなくとも部分的には、因果関係によって説明できそう」(46 頁) なものであり、「おそらくアブダクションによってたどり着かれるもの」(47 頁) と説明している。これに対して非自然的意味の例として挙げられているのは、定員オーバーを意味するエレベーターのブザーである。柏端は自然的意味と非自然的意味の違いは、前者が「事実含意的」(48 頁) であるのに対して後者はそうではないという点に表れていると説明する^{*4}。

この区別を踏まえて、柏端はグライスの非自然的意味の分析を次のようにまとめる (49 頁)^{*5}。

^{*4} もとのグライスの議論では事実含意性以外にもさらに四つの違いが挙げられている (Grice 1957, pp. 213-214, 邦訳 223-225 頁)。

^{*5} 柏端は単に「非自然的意味」としているが、具体例として挙げられているブザーの例はグライスが「無時間的な」と形容する非自然的意味であるのに対し、[NNM] は「特定の場面において」と修飾される非自然的意味の分析であり、[NNM] がそのままブザーの例に適用できるわけではない点は注意すべきだ (Grice 1957, p. 217, 翻訳 229-230)。これは後に「発話タイプの無時間的意味 (timeless meaning of an utterance type)」と「発話者の場面意味 (utterer's occasion meaning)」(「発話者の意味 (utterer's meaning)」, 「場面意味 (occasion meaning)」) という用語で表される区別であり (Grice 1968; 1969), より一般的な言葉づかいでは「規約的意味 (conventional meaning)」と「話し手の意味 (speaker meaning)」の区別と重なる。グライスにとっては非自然的意味は一枚岩な現象ではないのである。

NNM 行為者 x は ϕ をもたらすことによって受け手 y に ψ がもたらされることを意図しており、しかも、その意図を y が認識することによってこそ ψ が y にもたらされるということを意図している。

柏端によれば、[NNM] は『非自然的な意味』だけでなく『メッセージ』や『コミュニケーション』の本質的な特徴づけにもなっている」(50 頁)。こうしてこれまでの章で語られてきたコミュニケーションという行為が、グライスの非自然定意味(話し手の意味)と一致する、ないし少なくとも本質的な部分で重なり合うことが明かされる*⁶。ただし柏端は [NNM] をそのままでは受け入れず、次のように修正した分析を採用する(52 頁)*⁷。

NNM+ 行為者 x は、 ϕ をもたらすことによって受け手 y に ψ がもたらされることを意図しており、しかも、その意図を y が認識することによって、さらに、いま述べているこの意図自体をも y が認識することによって、 ψ がはじめて y にもたらされることをも意図している。

この分析が [NNM] と異なるのは「さらに、いま述べているこの意図自体をも y が認識することによって」という一節が含まれている点である。これにより、行為者 x は「まさにこの意図自体を y が認識することによって ψ がはじめて y にもたらされる意図」と表現されるような意図を担うことになる。すなわちコミュニケーションの主体には自己言及的な意図が要請されることとなる。

[NNM+] の自己言及的要素は、ストローソンからグライスに向けられた反例 (Strawson 1964) を排除するのに役立つとされている(52-53 頁)。ストローソン自身が提示した反例 (Strawson 1964, p. 120) は抽象的なものであったが、柏端はそれを次のように具体化している。

A 氏が B 氏に重大なことを知らせようとしている。たとえば誰が真犯人かといったことを。A 氏は、真犯人を示す「証拠」を、B 氏の目が届く範囲にさりげなく配置する。[……]A 氏は実際に犯人を知っていて、B 氏に知らせようとしているのである。ただ、何らかの制約があって、B 氏に直接伝えることができないのだ。さて、ここから話が複雑になる。じつは B 氏は A 氏が「証拠」を配置するのを陰から見てしまっていた。しかしそのおかげでむしろ B 氏は、問題の人物が真犯人だと思うようになる。なぜなら B 氏は、A 氏がこのようにせざるをえなかった事情を推測し、また、あの A 氏がここまでしている以上、実際 A 氏は真犯人に気づき、なんとかこちらにもそれに気づくよう画策しているにちがいないと解釈したからである。だが話はここで終わらない。じつはもう一段複雑である。以上に述べたことはすべて A 氏の想定内だったのだ。つまりすべては A 氏が意図したとおりのことだったのである。A 氏は、B 氏に

*⁶ グライスによる話し手の意味の分析をコミュニケーション的行為の分析と見なすのは珍しい解釈ではない。実際、ストローソンはグライスに反論する際に「グライスの分析が、『コミュニケーション／伝達する (communicate)』という言葉が持つ語義のうち、あらゆる意味の理論にとって基礎的な語義において、あるひとがほかのひとにコミュニケーション／伝達しようとする場面の分析として提示されているということは疑いない」(Strawson 1964, p. 120, 拙訳)と述べることから議論を始めている。またグライス自身がストローソンのこの反例を取り上げた際にも、自分の分析に対するこうした解釈に異議を唱えてはいない (Grice 1969)。

*⁷ グライス自身も [NNM] に当たる分析を採用し続けているわけではなく、Grice (1969) ではさまざまな反例を検討しながら分析を洗練させている。

陰から見られていることにも気づいていた。またそのさい、見られていることを A 氏は知らない B 氏が思い込むだろうということも、想定していた。つまり A 氏は「証拠」をこっそりと置いたのではなく、いかにもこっそりと置くかのような演技を B 氏に対して行ないつつ置いていたのである。自分の行為を見ることで、自分をよく知る B 氏がいろいろと考え、きっと真犯人に関する信念をもつようになるだろうという予測を立て、A 氏は、それに沿った行動に出ていたわけである。(53-54 頁)

柏端も述べるように、これはコミュニケーションではなく、むしろ「複雑な誘導のケース」(54 頁)である。だが A 氏は [NNM] で要請される意図をすべて備えている。しかし、[NNM+] で追加されている自己言及的要素はこうした複雑な誘導をコミュニケーションの事例から排除することができる。

実は [NNM+] のように自己言及的意図を用いた分析自体は、話し手の意味をめぐる分析においては目新しいものではない。ここで意図基盤意味論の歴史を簡単に振り返ろう。ストローソンの上記の反例は、意図の無限後退と呼ばれる問題の出発点となり、後にグライスやシフアーがその問題の解決をそれぞれの仕方で試みている (Grice 1969; Schiffer 1972)。ストローソンの反例そのものはグライスの元の分析に対して、話し手*8に要請される意図をさらに一つ付け加えることで排除できるのだが、そのように作った新しい分析に対しても同じ構造の反例を構築することができ、そうしたプロセスが限りなく続くため、同様の反例のすべてを排除するためにには話し手に無限に多くの意図が要請されることになる。これが意図の無限後退問題の骨子である。意図基盤意味論の論者たちは、この問題をいかに解決するかという点に特に力を注ぎ、分析を発展させてきた*9。この問題を受けてシフアーが提示した分析は相互知識 (mutual knowledge)、すなわち A が p と知り、B が p と知り、B が p と知っている、A が知り、A が p と知っている、B が知り、A が p と知っている、B が知っている、A が知り……と無限に続く相互的な知識の状態を表す概念を利用したものであるが、シフアーへの書評においてハーマンはそうした概念を用いたシフアーの分析さえ問題解決に寄与しないことを指摘した (Harman 1974)。そうしたシフアーへの批判において、ハーマンがグライスとシフアーの分析に欠けていると主張するものこそ、自己言及性なのである。

グライスによるさらに最近の論文「発話者の意味と意図 (Utterer's meaning and intention)」[(Grice 1969)] でもシフアーの本 [(Schiffer 1972)] でも、自己言及は避けられている。このゆえにこそ、分析をきわめて複雑にしてしまうような困難が生じているのである。(Harman 1974, p. 224, 拙訳)

ハーマンの考えでは、グライスやシフアーの分析がうまくいかないのはひとえに自己言及性を避けつつ意図の無限後退問題を解消しようとしているためであり、自己言及性を利用した分析を受け入れさえすれば問題は解決する。それゆえハーマンは話し手の意味、すなわち本稿で言うコミュニケーション

*8 柏端は「行為者」と「受け手」という言葉を使っているが、本稿では引用内を除き「話し手」と「聞き手」という広く使われている言葉を採用する。

*9 意図基盤意味論の論者たちが意図の無限後退問題に取り組んできた流れのさらなる詳細については拙論と拙論を参照してほしい。

ンの事例において、「[話し手]Sの意図は、少なくとも部分的には、まさにこの意図を[聞き手]Aが認識することでAにある反応 r を生み出そうというもの」(Harman 1974, p. 225)だとすればよいと言う。私の理解する限りでは、ハーマンの分析と柏端の分析に実質的な違いはない。

こうした理由から、柏端の[NNM+]はそれ自体としては前例のない分析ではない^{*10}。むしろその独創性は意図という概念をいかに理解するかという点にある。意図の無限後退を受け入れるにせよ、あるいはハーマンや柏端の主張するタイプの自己言及的意図^{*11}を利用した分析をおこなうにせよ、問題はそうした意図を持つとはどういうことかだ。意図基盤意味論の論者たちが意図の無限後退問題をどうにか解決しようとしてきたのは、まさに無限に多くの意図を持つということが私たちの持つ標準的な意図の概念と齟齬を来すと思われたためであろう。私たちが無限に多くの意図を持つことはありえないように思える。だからこそ意図の無限後退問題は分析の不備を示していると考えられてきたのである。同様にグライスやシファーのような意図基盤意味論者が[NNM+]に見られるような自己言及的意図を避けてきたとすれば、それもまたそのような意図の存在が奇妙に思われたためであろうと推測される。そうした自己言及的な意図が意図の無限後退問題を解決していると言えるには、それを話し手に帰するということが、少なくとも無限に多くの意図を帰するよりはもっともらしい仕方で理解できるのでなければならない。だがこれは明白なことではない。というのも柏端も述べる通り、[NNM+]が定めるような意図を具体的に語るならば、「無限に続く意図内容の記述が生成されることになる」(55頁)からだ。そうすると、意図の無限後退問題の解決に[NNM+]を提示するのは、無限に多くの意図の代わりに、無限に長い文で記述される一つの意図を持ち出すということに過ぎないように見えるが、この両者の奇妙さは一見した限りでは大差ない。それゆえ[NNM+]における自己言及的な意図をひとはどのように持ちうるのかという疑問が避けがたいものとなる。そしてこれに対する答えを用意している点にこそ、ハーマンにはない柏端の新しさがあるのである。

柏端にとって、「意図は、あるいは一般に態度は、世界に対する構えの一種である」(60頁)。それゆえ態度を持つことは態度の「顕在化」(59頁)とは区別され、態度を持つひとが態度を意識している必要はないと主張される^{*12}。同様に、態度は世界に対する構えの一種であるのだから、「実体化」(60頁)されて持ち主の頭に収納されている必要はなく、「意図の内容が無限に続く文の系列として特定可能だとしても、その意図をもつために無限の収納スペースが必要となることはない」(同上)。態度とそれを記述する文との関係は、さらに第四章で論じられている。柏端によれば、「心的な態度は態度をもつ主体の状態にほかならない。それは、こう言ってよければ、主体の中枢系の状態であるだろう」(90頁)と述べることで、主体が世界に対する構えを持つことを何らかの(中枢系の)状態を

^{*10} ただし三木(2015)でも述べているように、自己言及的意図説は意図の無限後退問題を避けうる現状では唯一の意図基盤意味論の理論である。それゆえ、意図基盤意味論を貫くならば選ぶべき道を柏端の分析は正しく捉えていると評価できる。

^{*11} わざわざ「ハーマンや柏端の主張するタイプの自己言及的意図」と述べるのは、それが意図の一般的な特徴であるとサールの主張しているような自己言及性(Searle 1980)とは異なる性質を持っているためである。これについては次節で改めて論じる。

^{*12} 話し手の意図が話し手にとって意識されている必要はないという観点はスperlベルとウィルソンによっても採用されており、スperlベルとウィルソンはそれによって意図の無限後退問題を解消しようとしている(Sperber & Wilson 1986/1995)。

持つことだと具体化している。そのときにそうした態度とその内容を表す文の関係は、ディヴィッドソンの比喩 (Davidson 1989, p. 59, 邦訳 104-105 頁) をもとに物体の重さの測定に喩えられている。私たちはある一つの宝石の重さを「20 グラム」とも「100 カラット」とも述べることができる。しかし「20 グラム」や「100 カラット」というのは宝石の重さそのものではなく、宝石の重さを数列に対応付ける仕方にすぎない。だからこそただ一つの宝石が持つ重さに二通りの表現を適用できるのである。「20 グラム」や「100 カラット」は宝石の重さを数列に対応付けることで他の物体の重さと関係づけるために用いられる表現にすぎず、重さそのものとは区別される。同様に、私たちは主体の態度の内容を特定する文を、「諸態度のあいだの（合理的または因果的な）関係を、全体として適切に説明する」(91 頁) 仕方で用いているが、だからといって態度自体がそうした文の内的な表象を持つことであるわけではない。従って柏端の見解をまとめるなら、まずそこには態度そのものとそれを記述する文との峻別がある。態度は主体が持つ状態、すなわち世界への構えであり、客観的なものである。そして私たちはそれを主体のさまざまな態度のあいだの関係を説明する仕方で文を用いることによって語る。態度そのものとそれを表現する文とがこのように区別されるために、用いられる文が仮に無限に長いものであったとしても、主体に奇妙な態度が要請されているわけではないというのが、柏端の主張である。

さらに柏端はこのように特徴づけられるコミュニケーションが、推意 (implicature) を利用したメタコミュニケーションも包含すると指摘する^{*13}。つまりグライス自身が想定していたであろうように、柏端の理解においても、グライスの推意の理論 (Grice 1975) はコミュニケーションの理論のなかに収まることになるのである。私たちのコミュニケーションは共同行為であり、共同行為には「参加者に共有された目的」(67 頁) がある。柏端はグライスの協調原理 (cooperative principle) を共同行為一般の原理と捉え直し、その場合に「協調原理は、『共同行為に参加している以上、個人は、全体の目的や方向性を踏まえて、適切な段階で適切なことを行なうべきである』といったものになる」(68 頁) と論じる^{*14}。こうした協調原理をもとにグライスの理論では、皮肉などの推意は「本来は目的のために順守すべき規範にあえて反することにより [……] 目的を達成」(66 頁) するという形で捉えられる。ここでの「規範」とは、グライスにおける会話の格率 (conversational maxims) であり、「諸格率と協調原理とのあいだの関係は、実践的推論における手段と目的の関係に対応する」(68 頁)^{*15}。話し手が格率にあえて違反するとき、聞き手は「共同行為主体であるわれわれの目的がなおもめざされている（すなわち協調原理に従っている）という大前提のもとで、なぜこのような（標準的方法をあえて無視するという）手段に出たのかを推測」(69 頁) し、これにより推意を理解することになる。こうした推意の理解は「いわゆるアブダクションの形式をもっている」(同上)。このようにしてなされるメタコミュニケーションは、それでもなお [NNM+] が捉えるコミュニケーションの事例なので

^{*13} ‘implicature’ の訳語として柏端が採用し、また清塚による Grice (1989) の翻訳でも採用されている用語は「含み」である。だが現在の語用論では「推意」という訳語のほうがよく見られるため、本稿では引用内を除いて「推意」で統一することにする。

^{*14} 協調原理を言語というより行為に関する原理と見なすことの正当性と、それがもたらす帰結については三木 (2012) でも論じている。

^{*15} 拙論で論じているように、グライスの理性論 (Grice 2001) と結びつけて推意の理論を理解することで、手段-目的推論が推意の理論に関わるということは文献からも正当化される。

ある。ただし、次節で論じるように推意をこのようにコミュニケーションの理論に組み込むことと、柏端が設定するコミュニケーションという現象の区分が整合的であるかどうかについては疑問の余地がある。この点については次節で論じる。

以上の柏端の議論についての批判は次節に回し、ここでは二点の補足をおこなう。コミュニケーションの分析についての補足と、推意とアブダクションの関係についての補足である。

まずコミュニケーションの分析に関して、意図基盤意味論の近年の展開が柏端の議論には反映されていないため、その点について述べる。近年の意図基盤意味論の論者のあいだでは話し手の意味を聞き手に向けられた話し手の意図によって分析するという立場に疑いが示されている。ディヴィスは「残念なことに広範なありきたりの事実が非常に明白に示しているらしきところでは、グライスによる意味、表現、指示の分析には根本的な欠陥がある。主な間違いは[……] 聞き手に向けられた意図を強調した点にある」(Davis 2003, p. 7, 拙訳)と述べている。実際、こちらの意図に沿った反応をすることが期待できないとわかっている相手に発話をおこなうということは珍しくない。ディヴィスが挙げているのは乳児に話しかけるという事例(Davis 2003, p. 8)であるが、ほかにも聞き手の反応を期待しないで発話をおこなう例は簡単に見つかる。こうした理由でディヴィスは聞き手への言及を分析から消去することを試みている。この立場はさらに近年のグリーンにも引き継がれ、ハーマン的な自己言及性との接続が試みられている(Green 2007)。こうした方向性が正しいものであるならば、柏端の分析[NNM+]は、さらに聞き手への言及を削除する形で修正される必要があるだろう^{*16}。

推意とアブダクションの関係について、第一点として、柏端は推意の理解がアブダクションの形式を持っているということが「グライスのテキストにおいて明示されているようには見えない」(69頁)と述べるが、この点についてグライスに好意的な理解をすることもできるということを指摘したい。というのも、Grice (1982)において自然的意味と非自然的意味が共有する構造を論じる際に、グライスは帰結という概念を持ち出しているのである。

私の念頭に浮かぶのはこうである。意味という概念の根となる観念、つまり[自然的、非自然的意味の]両方の事例に何らかの形で、もしくは何らかの修正のもとで適用される観念とは、 x が y を意味するならば、これは y が x の帰結であるという主張と同値であるか、少なくともそうした内容を含んでいるということだ。すなわち、自然的意味と非自然的意味の事例に共通するのは、帰結という概念をある仕方で解釈する限りでの、 y が x の帰結であるということなのである。(Grice 1982, pp. 291-292, 拙訳)

もちろんここで「アブダクション」という言い回しは使われていないが、グライスが以前に挙げていた例(Grice 1957, p. 213)が「その斑点は麻疹を意味する」などであったことを思い起こしてほしい。引用箇所によると、このときこの言明は「麻疹はその斑点の帰結である」という言明と同値である(ないしそれを含む)と捉えられていることになる。斑点をもとにその原因となる麻疹を推論するという形式は、アブダクションの推論形式と一致する。それゆえグライスが引用個所で述べている「帰結」とはアブダクションの帰結であるか、少なくともそれを含むようなものであると言える。こ

^{*16} ディヴィスとグリーンの分析の概要と、それに対する批判については三木(2014)と三木(2015)を参照してほしい。

の帰結関係が非自然的意味にも見られるとグライスは主張しているのだから、非自然的意味にアブダクションが関わっているというアイデアをグライスがすでに持っていたという可能性がある。さらに推意が非自然的意味の下位分類となるという標準的な解釈^{*17}に従えば、推意にとってアブダクションが基礎的であるということは、引用したグライスの主張から読み取りうると言えよう^{*18}。

第二点として、柏端は推意がもっぱらアブダクティブな推論によって理解されるということを自明視しているように見えるが、実はこの点に関してすでにいくつかの批判が提出されている。ディヴィスは、協調原理に基づくアブダクティブな推論では推意を十分に決定できないと主張する (Davis 1998)。例えば吹雪のさなかに「いい天気だね！」と皮肉を言う場合をディヴィスは挙げている (Davis 1998, pp. 65-66)。グライスの推意の理論に従ってこの発話を皮肉として解釈するためには、いい天気ではないという話し手の信念が、話し手の発話が協調原理に一見すると反するにもかかわらず実は協調原理に従いつつなされているということの説明に要求されるということになる。しかし話し手の行為は、話し手が本当にいい天気であると信じていて、文字通りに「いい天気だね！」と言ったと想定しても説明できる。あるいは皮肉ではなく比喩を用いていたのだと想定しても説明できるだろう。皮肉と理解されるはずの発話であっても、協調原理に基づくアブダクティブな推論ではさまざまな可能性のあいだから結論を十分に決定することができない。ディヴィスはこうした現象をもとに、推意は推論ではなく規約に依拠して計算されると論じている。同様の見解はルポアとストーンによっても提出されているが、その際にルポアらが依拠するのは推意の理解が用いられている言語や会話参加者の性別によって異なるという事実である (Lepore & Stone 2015)。もしも推意の理解がもっぱら協調原理に基づく一般的な推論能力に従ってなされるならば、同じ内容の発話から理解される推意が言語や性別によって異なるという事態は起こりそうにない。だが実際にそうした事態が観察される以上、推意は推論というより共同体ごとに共有されている規約に従って計算されているのではないか。これがルポアらの主張である。

2.4 思考の言語さえコミュニケーションに本質的ではない

最後の章では、改めて言語とコミュニケーションの関係が取り上げられる。ただし、第二章で言語とコミュニケーションを切り離した際に挙がっていたのはあくまで自然言語であったのに対し、ここで問題になるのはフォーダーの言うところの「思考の言語 (language of thought)」である (Fodor 1975; 2008)。第二章では言語使用がコミュニケーションにとって必要でも十分でもないという主張がなされたが、ここで問われるのは思考の言語がコミュニケーションにとって必要なのかということだ。

これに関しては、すでにまとめた心的態度の扱いから否定的な答えが導かれると柏端は主張する。心的態度を記述する文は、心的態度そのものとは別物であり、その心的態度をほかのもろもろの心的

^{*17} グライスは推意の導出に関わる言われたこと (what is said) という概念については、明示的に非自然的意味の下位分類 (具体的には話し手の意味の一部) としている (Grice 1969) が、推意について同様のことを明示的に述べている箇所は私の知る限りではない。しかし推意がグライスにとって非自然定意味、とりわけ話し手の意味の例となるということは、非自然的意味の特徴づけと話し手の意味の分析から帰結する。

^{*18} こうしたことは三木 (2009) や三木 (2012) でも述べられている。

態度との関係のもとで説明するのに用いられるものであった。それゆえ、例えば誰かがここが切符売り場だとわかっていると述べられるときに、「そもそも『ここが切符売り場だ』に対応する言語的表象を彼が持っている必要」(90 頁)はない。それゆえ、言語は「コミュニケーションを行なう人間の頭の中に文字通り存在しなければならないと考える必要は」(95 頁)ないのである。

とはいえ、こうした柏端の議論は不十分である。確かに心的態度を持つことはその主体が言語的表象を持つことを必要としないかもしれない。だがコミュニケーションをおこなう主体についても同じことが言えるだろうか？ 柏端によると、「受け手の側からすれば、結局のところ、コミュニケーションとは他者の意図を理解することである」(92 頁)。柏端は心的態度を持つことは言語的表象を持つことではないと主張し、そして「他者の意図を理解することは、他人の頭の中にある「文」(言語的表象)を解釈することではない」(同上)とも主張しているが、他者の意図を理解することが何らかの言語的表象を持つことを必要としないとは言っていない。むしろ「意図の内容の理解とは、何らかの文とその主体とを対応付けることにはちがいない」(93-94 頁)のだから、必要としないどころか他者の意図の理解には言語的表象が必要なのである。従ってコミュニケーションにおいて、仮に話し手には言語的表象が必要なくとも、聞き手には言語的表象が要求されることになる。

だが話し手に言語的表象は不要なのだろうか？ この点について二つの反論を考えることができる。一つはコミュニケーションが相互になされるという事実から論じられる。柏端も言うようにコミュニケーションは「メッセージの送りあいになるのが普通」である。だとすれば、コミュニケーションにおいて聞き手になる主体は別の局面においては話し手になり、また逆に話し手になる主体は別の局面においては聞き手になるということができるのでなければならない。つまり、コミュニケーション主体は話し手と聞き手のいずれにもなれるのでなければならない。話し手にはなれるが聞き手にはなれない主体というのは、十全な意味ではコミュニケーションに参加できないのである。だが前段落で見たように、柏端の議論に従う限り聞き手は言語的表象を備える必要がある。ゆえにコミュニケーションに加わる主体は一般に言語的表象を備えている必要があることになる。さらなる反論として、[NNM+]を引き合いに出すことができる。[NNM+]によれば、話し手は聞き手によって自分の意図が認識されることを重層的な仕方得意図しなければならぬ。意図の認識と意図の理解は同じ事態を表しているだろう。意図の理解は主体と文の対応付けという言語的表象を利用する営みだとされているのだから、聞き手が適切な言語的表象を抱くことを話し手は意図していなければならない。だがこのようなことを話し手は対応する言語的表象を心に抱くことなく意図しうのだろうか？ 当該の意図自体が言語的表象として話し手に抱かれている必要は確かにないのかもしれない。しかし聞き手が抱くべく意図されている言語的表象を話し手が抱くことなく、しかし話し手に当該の意図を帰属できるという状況は整合的に成り立ちうるのだろうか？ 言い換えれば、問題となっている理解の内容を言語的に表象することなく誰かに何かを理解させようと意図するということは果たして可能なのだろうか？ もしもそれが不可能であるならば、話し手は結局のところコミュニケーションにおいて「メッセージ」に対応した内容の言語的表象を持たざるを得ない。そしてこれが可能であることは本書では示されていない。

以上で見たように、第四章で柏端は思考の言語のような内的な言語表象さえコミュニケーションにとって本質的ではないと主張している。だが柏端の議論はせいぜいある心的態度を持つのにその心的

態度を記述する言語的表象が主体に抱かれている必要はないということを示しているのみである。コミュニケーションにおいて「メッセージ」に対応する内容の言語的表象が、話し手や聞き手に抱かれている必要がないとまでは示されていない。むしろ 1. 聞き手にとってのコミュニケーションとは話し手の意図の理解である、2. 意図の理解とは文と主体との対応付けである、3. コミュニケーションは相互になされる、4. コミュニケーションにおいて話し手は自分の意図が聞き手に認識されることを重層的な仕方得意図するという見解からはむしろ、コミュニケーションが言語的表象を前提とした営みであるという立場が示唆される。

2.5 まとめ

柏端が四つの章で主張していることをまとめると、次のようになる。

1. コミュニケーションとは「メッセージ」を送る行為である（第一章）。
2. コミュニケーションと、自然言語のような外的な言語の使用や思考の言語の所有は切り離される（第二章、第四章）。
3. コミュニケーションは、特有の仕方得意言及的な要素を持つ意図を伴った行為によって分析される（第三章）。

柏端の議論に対し、すでにいくつかの留保を与えた。だがここまででも触れていたように、さらに大きないくつかの問題がある。次節では、1. コミュニケーションという現象の範囲、2. コミュニケーションの分析にとっての説明目標、3. コミュニケーションや「メッセージ」を意図という概念によって分析することの正当性、4. 心的態度に対する柏端独自の見解に基づいた [NNM+] 擁護の妥当性を批判的に検討する。

3 批判

柏端の議論を受けて、本稿では大きく四つの疑問を提起する。ただし、それらは決定的な反駁という性質のものではなく、不十分な点や不明確な点の指摘に留まる。従って、ここで挙げる疑問のゆえに柏端の主張が退けられるというわけではない。むしろ柏端の、あるいは広く意図基盤意味論の立場に賛同するにせよ反対するにせよ、以下の論点がそうした立場を追及するうえでの手掛かりになることを意図している。四つの疑問はそれぞれ 1. コミュニケーションという現象の特徴づけ、2. コミュニケーションの成功がもたらす帰結、3. コミュニケーションや「メッセージ」を意図という概念によって分析することの正当性、4. 心的態度に関する独自の見解に基づいた柏端による [NNM+] の擁護の成否に関するものである。

3.1 コミュニケーションという現象の画定

この問題に関連して、結局コミュニケーションがさまざまな言語行為の一種なのか、それともそれよりも包括的なものなのかという点に関する不明確さについては、すでに前節で論じた。柏端の採用

するグライスの見地からすれば、コミュニケーションは多様な言語行為にまたがる包括的なものとなるが、他方で第2章において柏端は賭けのような言語行為をコミュニケーションから排除し、コミュニケーションをさまざまな言語行為の一種でしかないものと見なしている。もちろんこの二つの見解が直ちに矛盾するわけではない。コミュニケーションがある程度は包括的な概念でありながら、そこには賭けという言語行為は含まれていないということも可能だからだ。問題は、結局のところ柏端は、コミュニケーションなる行為を言語行為の分類のなかでどのように位置付けているのかということだ。このことに関しては前節の指摘で十分であろうから、ここではこれ以上追求しない。

本節で取り上げたいのは、コミュニケーションとコミュニケーションではない行為との線引きに関する問題である。以下ではまず、柏端がおこなっている線引きと柏端が提示する理論とが一貫していないということを、嘘についての柏端の議論を振り返りながら指摘する。だがこれはあくまで柏端の議論の内的な整合性の問題に過ぎない。本節で次に問うのは、コミュニケーションとフィクションの語りを区別し、前者のみを分析対象とする方針の是非である。これに関して二つのことが問われなければならない。まずそうした区別はどれだけ可能なのかという問題である。そして、仮に区別ができたとして、フィクションの語りには当てはまらず、フィクションではないコミュニケーションには当てはまる分析を求めることは正当なのかという問題である。

3.1.1 嘘は [NNM+] から排除されるのか？

まずは嘘について見てみよう。柏端によると、「嘘は、そのそっくり全体が、陳述や報告といったコミュニケーションの偽装である。嘘を嘘たらしめている意図はけっして相手に知られてはならない」(37頁)ため、「意図によって区別するならば嘘はコミュニケーションではない」(38頁)。従って、柏端の見解では、嘘を成り立たせる意図とコミュニケーションを成り立たせる意図は区別されるため、嘘とコミュニケーションは異なる行為となる。本当にそうだろうか？

「嘘を嘘たらしめている意図はけっして相手に知られてはならない」という主張について検討しよう。このことが「君の猫ならマットの上にいたよ……嘘だけど」といった発話が「自己破壊的」(37頁)であることによって示されると柏端は考える。だがこの例は嘘に特有の性質を示しているわけではない。というのもこうした発話は嘘であるか否かを問わず、一般的になしえないものだからである。

このことはムーアのパラドクスを想起することで見て取れる。問題の発話に表れる「嘘だけど」は「私は信じていないけど」と同値か、あるいはそれを含むようなものとして理解されるだろう。そのように理解すると、柏端の挙げている例は「君の猫ならマットの上にいたよ……私は信じていないけど」と言い換えられる。これはいわゆるムーアのパラドクス (Moore 1993) の変種であり、こうした発話が「自己破壊的」という言葉が用いられるかはともかく) 通常なしえないものであることについては広く合意されている。だがムーアのパラドクスは嘘に特有の現象ではない。何かを主張しながらそれを信じていないと語ることは、その主張が嘘であるか否かを問わず奇妙なのである。

だがこの奇妙さは何に由来するのだろうか？ 参考になるのはグライスがムーアのパラドクスについて論じている個所だ。グライスは話し手が協調原理と格率を遵守しているという仮定を維持するために聞き手が持ち出す想定(推意として導出される内容)には、「何らかの特定の格率が遵守されて

いる、もしくは遵守されていると話し手が思っているという内容の想定が含まれるようには意図されていない」(Grice 1978, pp. 41-42, 拙訳)と述べる。そしてグライスはこのことがムーアのパラドクスに一定の帰結をもたらすと考ええる。

私が p と言うときに、自分が p と信じているということを私が会話の推意としたというのは正しくない。というのも私が p と信じている [……] という想定は私が質の第一格率 [偽だと信じていることを言わないという格率] を遵守しているという想定にすぎないからである。[……] p と言ったひとが自分が p と信じているということを「含意した (implied)」, 「示した (indicated)」, 「暗示した (suggested)」と記述するのは自然な言い方ではない。自然な言い方は、そうしたひとは p という信念を表現した (expressed)[……] ということだ。(Grice 1978, p. 42, 拙訳)

グライスにおける「言う (say)」とは、あらゆる推意の出発点になる基礎的で包括的な言語行為であり、細かな問題を見れば、話し手が意味することのうちで話し手が用いた表現の真理条件的内容と対応する部分に当たる (Grice 1969, pp. 87-88)。上記の引用で示されているのは、この包括的な「言う」という行為をなしたとき、自分が対応する信念を持っているということを推意としているのではなく表現しているということだ。推意であれば取り消し可能であるため、発話に「私は信じていないけれど」のような取り消しのための文言をつけてもかまわないということになるが、グライスは主張しているのは自分が言ったことを話し手が信じているということはそのように取り消し可能な内容ではないということである。それゆえにムーアのパラドクスに表れる発話はなされえないものとなる。「 p だけど私は p と信じていない」や「 p だけどそれは嘘だ」といったたぐいの発話がなされないのは、言うという言語行為と協調原理および格率との一般的な関係ゆえであるというのがグライスの考えである。

グライスの議論が正しければ「君の猫ならマットの上にいたよ……嘘だけど」のような発話が「自己破壊的」なのは、柏端の考えるように嘘の特性によるものではない。嘘であろうがなかろうがそうした発話はそもそもおかしいのである。むしろ柏端の挙げる例においてムーアのパラドクスが生じているという事実は、柏端の挙げる例があくまで言うという言語行為の一例であるということを示唆している。というのも、そのように考えれば柏端の例が「自己破壊的」であることがグライスの方針に従って説明されうるからである。だが言うという言語行為はグライスにとって話し手の意味の一部であり、柏端の言い方ではコミュニケーションの一例となる。だとすれば、柏端の挙げる例は柏端の意に反し、嘘があくまでコミュニケーションの一例であると解釈することでうまく説明されることとなる。

以上の理由で柏端が挙げている例は嘘がコミュニケーションとは別の営みであるということを示すには不適切なものであるが、それでもこれは単に例がよくなかったというにすぎず、より一般的な観点から、嘘を嘘たらしめるような意図がコミュニケーションの特徴づけと不整合になるという可能性はある。そこで嘘を嘘たらしめる意図というものを具体的に考え、これが柏端の考えるコミュニケーションから排除されるのかを見てみよう。柏端は明示していないが、嘘を嘘たらしめている意図があるとすれば、それは「偽だと信じている内容を聞き手に信じさせようと意図し、かつそれを偽だと信

じていることは聞き手に気づかせまいと意図する」といった形で表現されるような意図であろう。表記を [NNM+] に合わせるならこうなる（嘘の場合には意図された反応 ψ は信念の形成となり、その内容について真偽を問えるだろう）。

LIE 行為者 x は、 ϕ をもたらすことによって受け手 y に ψ がもたらされることを意図しており、かつ x は ψ の内容が偽だと信じており、 x が ψ の内容を偽だと信じていると y に気づかせまいと意図している。

これと柏端の [NNM+] を見比べてみよう。

NNM+ 行為者 x は、 ϕ をもたらすことによって受け手 y に ψ がもたらされることを意図しており、しかも、その意図を y が認識することによって、さらに、いま述べているこの意図自体をも y が認識することによって、 ψ がはじめて y にもたらされることをも意図している。

[NNM+] には行為者が受け手にもたらす心的態度の内容の真偽について行為者自身がどのように判断しているかについての条件は含まれていない。だが LIE に特有なのはまさにそうした条件である。ゆえに、[NNM+] と [LIE] に不整合はなく、これらは両立可能である。というのも、 y に信じさせようとしている内容（仮に p とする）が偽であると x が信じており、かつそのことを y に気づかせまいと意図しながら、それでもなお自分が y に p と信じさせようとして意図し、そしてそう信じさせようという意図を y に気づかせようとして意図することは可能だからである。修正前の [NNM] や Grice (1969) におけるさらに複雑な分析でも事情は変わらない。グライスの分析において、聞き手を騙そうとして自分が偽だと信じていることを話し手が意味する／コミュニケーションすることは、意味の分析のレベルにおいては排除されず、整合的に成り立ちうるのである。従って、柏端が [NNM+] を採用するならば、第二章の議論に反して嘘はコミュニケーションの事例でありうるということになる。

具体例を考えてみたなら、[LIE] と [NNM+] は単に両立可能であるばかりか、むしろ典型的な嘘の事例では [LIE] と [NNM+] の両方が成り立っているということがわかる。太郎が次郎をからかおうと思って、本当は花子が図書館にいないと知っていながら「花子は図書館にいるよ」と嘘をつく場面を考えてみよう。太郎は自分の言っていることが偽であると信じているし、かつ次郎をうまくからかうためにはそれが偽であると自分が信じていることについては次郎に気づかれまいとしているだろう。しかし同時に太郎は、次郎に自分がさも誠実なコミュニケーションをおこなっているかのように誤認させることで、花子が図書館にいるのだと信じさせようとして意図しているだろう。この場合、太郎は自身の発話によって次郎にそうした信念をもたらすことを意図しているし、次郎にはそれが誠実なコミュニケーションだと認識してもらいたいのだから、その信念をもたらそうという意図自体が次郎に認識されることも意図しているのでなければならない。それどころか、太郎は [NNM+] のような意図さえ持っているはずだ。そうでなければ、そもそも太郎は誠実なコミュニケーションを装おうとさえしていないことになる。太郎が隠そうとしているのは、あくまで次郎にもたらそうとしている信念が偽であると太郎が実は信じているということであって、花子が図書館にいるという信念を次郎にもたらそうとしているということではない。もしも花子が図書館にいるという信念を次郎にもたらそうと意図していなかったり、あるいはそうしたものをもちたそうという意図を次郎に気づかせよう

と意図していなかったりしたならば、太郎の行為はもはや嘘でさえなく単なる心理の誘導となるだろう。

柏端の挙げる例は嘘に特有な性質を示しておらず、また「嘘を嘘たらしめる意図はけっして相手に知られてはならない」ということを [LIE] の形で理解する限り、これは [NNM+] と両立可能である。さらに上記の例から、むしろ標準的な嘘の事例とはまさに [LIE] と [NNM+] が両立しているようなものであるとさえ言える。一般的に言って、嘘はコミュニケーションとは異なる行為ではなく、不誠実なコミュニケーションなのだと考えるべきである。

嘘に関する以上の議論は、単に柏端の分析 [NNM+] が嘘をコミュニケーションから排除できないと指摘しているにすぎず、嘘を排除する形で [NNM+] を修正することも、あるいは逆に嘘をコミュニケーションとして用意することも難しいことではない。フィクションのコミュニケーションからの排除は、それよりも重大な問題を示唆する。このことを次に論じる。

3.1.2 コミュニケーションとフィクションを語ること

フィクションに関してここで問いたいのは、フィクションとコミュニケーションは現象においてここまで区別されるものなのかということと、仮に区別可能であったとして、フィクションを排除してコミュニケーションのみを考察対象とすることで、コミュニケーションの分析が損なわれることはないのかということである。第一の問題は具体例をもとに論じ、第二の問題についてはデリダのオースティン批判を参照する。

フィクションの語りをコミュニケーションから区別しようと提案するとき、柏端は現実の発話の事例はコミュニケーションかフィクションの語りに明確に分けられると考えているように思える。もちろんすべての事例をそのように分けられるというのではなくとも、普通の発話についてはおおむねそのようなことが言えると前提されているはずだ。だが、現実の発話はしばしばそのどちらとも分けがたい様相を呈する。いくつかの例をもとにこれを論じる。そのために本節ではコミュニケーションが試みられていることの指標として、[NNM+] が記述する話し手の意図の有無を想定する^{*19}。

フィクションのなかでコミュニケーションが試みられていると考えられる例がある。

- (1) 太郎は恋人の花子に贈る指輪を用意しているが、そのことを言い出せずにいる。あるとき太郎は演劇作品に出演し、次郎という人物を演じることになる。その作品は出演者たちがしばしばアドリブの演技をしたり、観客に向かって語りかけたりしながら笑いを取るコミカルなものだった。太郎は舞台上で次郎を演じながら、観客のなかに花子がいることに気づく。そこで太郎は大げさな身振りを交えながら言う。「次郎からここで発表したいことがあります！　そこで見ている花子さん、終演後にプレゼントをしたいから楽屋においで！」

この例では太郎は自分があくまで次郎を演じていることを「次郎からここで発表したいことがあります！」で明示している。それゆえ一連の発話は次郎という架空の人物と関連付けられた、コミュニ

^{*19} これは柏端の議論との関連を明確化するためであり、本稿は [NNM+] や意図基盤意味論へのコミットメントは持っていない。

ケーションのふりとなる。だが他方で太郎は花子に呼びかけ、プレゼントをしたいということを伝えている。ここでの太郎の意図は、そうした呼びかけが単なるフィクションとして片づけられることではなく、花子への真正のコミュニケーションと認識されることであろう。すなわち太郎の意図は[NNM+]が捉えようとしている当の行為をすることである。こうした場面で、太郎はいわばフィクションのなかでコミュニケーションをしている。こうした事例はテレビや演劇におけるコント作品では笑いを取る標準的な手法の一つとなっている（出演者が作品の内部で自分自身のスキャンダルについて釈明する場面などを想像してほしい）。

フィクション中のコミュニケーションという現象は演技に限ったものではない。多くの場合、小説には事実と空想とが混在し、それらがしばしばひとつの文で重なり合う形で語られる。例えば医療ミステリーにおいてある登場人物が施した医療的処置について説明されるとき、その人物がそれをおこなったということはフィクションでありながら、その処置そのものの説明は事実である（か、少なくとも作者はそう思っている）のが普通であり、また作者はそれが事実であると読者に信じさせようと考えているだろう（それゆえ読者から誤りが指摘されれば訂正するはずだ）。ミステリーやサイエンス・フィクション、歴史小説と言ったジャンルにおいては、このような仕方で読者に信じさせようと思図された内容とフィクションの内容とが混在する文が多く見られる。

以上で見たフィクション中のコミュニケーションという事例の特徴は、一つの言語行為ないし一つの文において、あからさまに偽であるような内容を含むというフィクションの側面が見られつつ、同時に聞き手に何かを信じさせようという意図が関わるというコミュニケーションの側面も見られるという点である。こうした事例はコミュニケーションとフィクションを区別する枠組みにはうまく収まらない。だがこうした現象は多くのフィクション作品において生じているありふれたものでもある。

フィクションのなかでのコミュニケーションとは逆に、コミュニケーションのなかでフィクションの語りが生じることもある。次のような例を考えてみてほしい。

- (2) 「ドアを開けばなしにするとお化けが入って来ちゃうから、きちんと閉めないといけませんよ」
- (3) 「人参も残さず食べないと、人参くんが悲しくて泣いちゃうよ」
- (4) 「花子が事故にあって困っていたんだけど、そこにこの王子様がさっそうと登場してお姫様をお救いしたというわけさ」

(2) と (3) は典型的には子供に向けてなされうる発話であるが、それに限るわけではない。こうした事例に特徴的なのは、これらが聞き手に何らかの信念を引き起こそうと思図して話し手によって発話されたものでありうるにも拘わらず、その発話の字義的内容にフィクションが含まれており、しかしメタファーや皮肉の場合と違ってそうしたフィクションであるような内容がまさに話し手が聞き手に信じさせようとしている内容に貢献しているということである。これらの例においては、コミュニケーションの一部としてフィクションが語られているのである。フィクション内のコミュニケーションと同様に、こうした事例は私たちの日常会話においてありふれている。

こうした事例からわかるのは、コミュニケーションとフィクションの語りの区別はそれほど自明ではなく、またコミュニケーションかフィクションであるか不分明な事例が例外的と言えるほどに周縁

的とも言い切れないということだ。また私たちが発話をおこなう際、あるいは発話を受け取る際に、こうした発話はフィクションを含まない純粋なコミュニケーションと比べて処理が難しいものではない。私たちの日常の会話において、コミュニケーションとフィクションは多くの混在事例を含むグラデーションをなしており、その発話産出と発話理解における処理も少なくとも直観的にはおおむね同じようになされているというのが実情である。もちろんコミュニケーションとフィクションとのあいだに線を引くことが不可能だということではない。だがそうした線引きは恣意的ではないものとして正当化されない限り、コミュニケーションという現象の理解に歪みをもたらしてしまうという懸念が付きまとうだろう。

フィクションとコミュニケーションの区別という問題は、デリダによるオースティンの批判へも私たちの目を向けさせる。デリダが提起しているのはフィクションの語りを寄生的なものとして脇に置くことの正当性への疑念である。オースティンは柏端と同様、舞台上での発話などに見られるフィクションの語りを標準的な言語行為と区別し、考察の対象から排除する。

[……] 発話である以上、私たちの扱うパフォーマンスもまた、あらゆる発話に感染する別の病を引き継いでいる。こうした病についても同様に、あとでさらに一般的な説明が与えられるかもしれないが、いまはあえて除外しておく。私が意味しているのは例えば次のようなものである。例えば舞台上で俳優が口にするとき、詩に取り入れられるとき、独り言で話されるとき、行為遂行的発話は、独特の仕方で空虚な、もしくは無用なものとなる。(Austin 1962, pp. 21-22, 拙訳, 強調原著者)

柏端が念頭に置いているフィクションは小説だと思われるが、オースティンは小説には言及せず、演劇と詩について語っている。それでもこれらをひとまとまりに「フィクション」と呼ぶことに問題はないだろう。独り言はフィクションの語りとは異なるが、これもまとめて典型的な行為遂行的発話に対して「寄生的な行為遂行的発話」と呼ぶことができる。

デリダはオースティンによる上記のような排除に反論する。

[……] オースティンが容認している危険の一般性は、一種の堀であるかのように言語を取り囲んでいるのだろうか。一種の堀とはすなわち、一つの破滅の場ではあれど、発語はそこへはつねに飛び出さずにいることができ、自らの本質やテロスによって庇護されて自己のうちに即時的にとどまることでそれを逃れうるような、そうした外的な場だということだ。それともむしろ反対に、この危険は、発語の内的かつ積極的な可能性の条件なのだろうか。(Derrida 1989, p. 17, 邦訳 42 頁, 強調原著者)

ここで述べられているのは、オースティンが考察から脇に置こうとした寄生的事例が、単に脇においておけば済むようなものにすぎないのか、それともそもそもそうした寄生が可能であるということが行為遂行的発話の本性に属しているのかということである。そしてデリダは「そもそも、結局のところ、オースティンが異常、例外、『不真面目』として排除しているもの、つまり（舞台上での、詩のなかの、あるいは独り言のなかでの）引用は、ある一般的な引用性の——あるいはむしろ、ある一般的な反覆可能性の——限定された変容なのではないだろうか」(Derrida 1989, p. 17, 邦訳 43 頁, 強調

原著者), 「そのような一般的な引用性がなければ、『成功した』パフォーマティヴもありさえないのではないだろうか」(同上)と問いかける。というのも、「あるパフォーマティヴな発言は、もしもそれを決まり文句として言う行為が一つの『コード化された』ないしは反覆可能な発言を反復するのでなかったなら、成功」(Derrida 1989, p. 18, 翻訳 44 頁) しえないからである。

オースティンとデリダの見方の対比は明確だ。デリダの見るところ、オースティンは核となる事例として典型的な行為遂行的発話があり、寄生的な事例はあくまで例外に過ぎないと考えている。それゆえ、そうした寄生的な事例が現れることなく本来の行為遂行的発話のみがなされるということが可能であり、また本来の行為遂行的発話のみを分析の対象としてもそうした分析は行為遂行的発話をきちんと捉えるものとなりうるとされる。これに対してデリダは、寄生的な事例を許すような特性こそが本来の行為遂行的発話の前提条件なのであり、それゆえ寄生的事例を排除して本来の行為遂行的発話のみを囲い込んだなら、行為遂行的発話の分析はなしえなくなるのではないかという懸念を示している。

行為遂行的発話とコミュニケーションが重なり合う概念であるとすれば、こうした批判は [NNM+] にも及ぶこととなる。というのも、[NNM+] はフィクションの内容を含まない純粋なコミュニケーションにのみ当てはまるものとされているからだ。すなわち、フィクションとコミュニケーションを分け、かつ後者のみをターゲットにして作られた分析が [NNM+] であり、こうした方法でコミュニケーションの分析が可能であると前提されているのである。もしもデリダが指摘するようにフィクションのような寄生的な事例を考察から排除することがすでにコミュニケーションが持つ重要な特徴を取り逃すことにつながっているとしたら、そうした前提に基づく分析は初めから失敗が運命づけられていることになってしまう。従って分析が追及するに値するものとなるためには、そうした前提を採用することがデリダの主張に反してコミュニケーションの重要な特徴の見過ごしにつながらないということを示す必要がある。例えばデリダは行為遂行的発話がそもそも「コード化された」発言の引用としてしか成り立たず、この引用性がフィクションや独り言における引用も生じさせると考えている。[NNM+] にはこうした引用性に関する記述はなく、話し手が適当な意図さえ持てばコードや他のコミュニケーションの反復といったものを含まずともコミュニケーションが成り立つという含意を持つ。しかしそのようなコミュニケーションはフィクション外の事例としてさえ存在しているのだろうか？ フィクションを考察から排除したことの見返りとして、私たちはフィクション外のコミュニケーションさえ捉えることのできない分析を手にはしないだろうか？ これがデリダのオースティン批判から導かれる問いかけである^{*20}。

以上で、第一に嘘をコミュニケーションから排除しながらグライスの見解に基づいたコミュニケーションの分析として [NNM+] を採用するのはそのままでは不整合であるということ、第二にフィクションの語りをコミュニケーションから排除する十分な正当化が与えられていないということを見

^{*20} これに関連して、2.2 節では柏端の本書 2 章の議論が示すのはコミュニケーションに言語的構造が関与する必要はないということだけであり、記号化された信号全般が関与する必要がないということではないということを指摘した。また 2.3 節では、一見するとコードや記号といったものを外れているように見える推意という現象さえ、規約に依拠している可能性があるという主張する近年の論者を紹介した。コミュニケーションがコード、記号、規約といったものから切り離せるのかそうでないのかは、いまだに決着のついていない問題である。

た。私の挙げた例からは、コミュニケーションとフィクションはそれほどはっきりと分かれる現象ではないということが示されており、またデリダの議論からは仮にそれらが分けられていたとしてもコミュニケーションのみに当てはまる分析を追及したなら当のコミュニケーションさえうまく捉えられなくなる可能性が指摘される。柏端の見解に基づいて理論を発展させるには、こうした問題に答える必要がある。

3.2 コミュニケーションが成功したとき何が起きるのか？

3.1 節ではコミュニケーションの分析はいかなる現象を分析対象とするのかということに関する問題提起をおこなった。だが分析にとって重要なのは扱う対象の画定だけではない。コミュニケーションの分析にとっては、コミュニケーションの成功時に何が起きるのかということも鍵となる。それがわかれば、私たちはコミュニケーションを「そうした何かを生じさせるような行為」と見なしたうえで、分析を進めることができる。つまりコミュニケーションの成功時に起きることは、コミュニケーションの分析にとっての説明目標を与えるのである。

では柏端はコミュニケーションの成功において何が起きると考えているのだろうか？ 柏端によると「[NNM+]においては、一つ目の意図の達成に必要なあらゆる意図が、隠されることなく明るみに出ることが意図されている」(55 頁)。そのことから考えると、コミュニケーションが成功したときに起きるのは話し手が持つ第一の意図の達成に必要なあらゆる意図が実際に話し手と聞き手のあいだで明るみに出ることだというのが柏端の見解だろう。だが意図が明るみに出るとはどういうことだろうか？

柏端の分析や挙げている事例からすると、ここで柏端が想定しているのは 2.3 節で紹介したシファアの相互知識に類するものであるか、もしくはそれを弱めたものであると考えるのがもっともらしい。つまり話し手のすべての意図を聞き手が認識し、そしてそのことを話し手も知っており、話し手が知っていると言き手も知っており、……という状況、あるいはそれを弱めた状況である。ここではもっとも強く解釈し、コミュニケーション成功時に起きるのは話し手のすべての意図に関する話し手と聞き手のあいだの相互知識であると柏端が捉えているものと想定しよう。さて、これはコミュニケーション成功時に起きねばならないことの記述として十分だろうか？ 十分ではないと考える理由がある。

かつてベネットがグライスの意図基盤意味論と行動主義的心理観を接続し、行動主義のもとでの言語的行動の説明を試みた (Bennett 1976/1990) が、テイラーはそうしたベネットの著作を取り上げた書評において、意図基盤意味論がコミュニケーション成功時に起きなければならないことを取り違えていると指摘している (Taylor 1980)。

テイラーはベネットの考案する次の例に注目する。

オペラの公演中に私は離れた席の友人を見遣る。私たちの目が合う。彼女は鼻をつまみながら大げさな仕方で顔をしかめる。読者諸君にもこうした出来事はよくあるだろうし、自分はその公演を嫌っているということを私の友人が意味したということに同意するだろう。(Bennett

1975/1990, p. 12, 拙訳, 強調原著者)

テイラーはこの例と次の例を比較せよと言う。

再びオペラ公演での私の友人を考えてほしい。彼女の手を見たことで、私は彼女が公演を嫌っていることを知っているかもしれない。彼女は自分の手が見えるところにあると知っているため、私がそう知っていることを知っているかもしれない。私は、私がそれを知っていると彼女が知っていることを知っている。そして私が知っていると彼女が知っていると私が知っているに違いないと彼女は知っている。そして私は認識する……などなど。だが何らかの理由でこうしたすべてがひどく気まずいことだと想像してほしい。私の義弟がオーケストラの指揮をしているのだ。そのため私たちはそれをそのレベルで留め、それについて何も言わないようにしたいという気持ちを持っている。彼女は注意深く私のほうを見ないようにする。(Taylor 1980, p. 294, 拙訳, 強調原著者)

テイラーが問題にしているのは、関連する相互知識さえ成り立てばコミュニケーションの成功にとって十分であるのかということである。テイラーの挙げている例において、彼女の手の動きは彼女が公演を嫌っているということを二人にとっての相互知識としている。柏端の [NNM+] も、そこで記述されている意図が実現したならそういう状態をもたらすものとして提示されているはずである。しかし、テイラーの考えでは、上記のテイラーの例において彼女が公演を嫌っていることは二人のあいだで適当な仕方で共有されていない。それゆえにテイラーの例は意図基盤意味論の論者が満足するような条件を備えているにもかかわらず、コミュニケーションの事例ではないとテイラーは主張する。

人間のコミュニケーションは単に情報を伝達するということではないのである。それは例えば単に聞き手に何らかの信念を生み出すといったことではない。それはある事柄が私たちのあいだのこと (entres nous) であるという認識をもたらすのだ。(Taylor 1980, p. 295, 拙訳, 強調原著者)

テイラーはさらに、何かがそうした「私たちのあいだのこと」となりうるのは「それが何らかの媒体に体现されている、すなわち表現されているときのみである」(Taylor 1980, p. 296, 拙訳) であると主張する。そしてこうした理由から、テイラーは意味やコミュニケーションを意図へと分析しきることとはできないとし、意図基盤意味論は見込みのない戦略に基づいていると結論する。とはいえそうしたテイラー自身の積極的な主張はここでは取り上げず、「私たちのあいだのこと」という事態について考えてみたい。

テイラー自身は「私たちのあいだのこと」という概念を明確化していないが、テイラーの例と次のような通常のコミュニケーションの例を比較することでテイラーの主張をうまく解釈することができる^{*21}。

^{*21} この例で言語的発話が生じていることは本質的ではない。「ひどい公演だったね」と言う代わりに、友人は肩をひそめながら首を振るといったジェスチャーをするのもよい。

- (5) オペラの公演が終わった直後に、私は同じ公演に来ていた友人と出くわす。友人は「ひどい公演だったね」と言う。

テイラーの例と (5) との違いの一つは、話し手である友人が持つコミットメントにある。テイラーの例において、友人が公演を評価していないということは「私」と友人にとっては互いに（相互知識になっているという意味で）明白であるが、公の場で「私」が「あの公演つまらなかったんでしょ？」などと言ったときに友人は「そんなことは言っていない」と否定してもかまわないし、「私」はそれを責めることはできない。実際、テイラーの例で「私」と友人は「それについて何も言わないようにしたい」と思い、そうしているのである。これに対し、(5) のような場合に友人が同じように否定したなら、「私」は友人が言を左右していることについて非難することができるだろう。従ってテイラーの例では友人のオペラに対する評価は「私」にとって明らかであるとはいえ、友人はその後の自分の振る舞いについてのコミットメントを形成してはいないのに対し、(5) では友人はそれ以降に一定の方向性に即した振る舞いをする事へのコミットメントを形成し、それに反したならば非難を受けうることになっているのである。テイラーの例においては「私」の義弟がオーケストラを指揮しているがゆえに、友人は自身の態度をあからさまにしつつもこうしたコミットメントまで形成することは避けていると考えられる。

ここでのコミットメントは特有の形を伴っている。通常の意図や信念に関与するコミットメントは行為者が単独で負うものであって、コミットメントに反したところで他者から責められるいわれはない。だが (5) のような場合には、コミットメントに反したことを友人がしたなら「私」が友人を責めることができるという点で、友人が「私」に対して負うものとなっている。また逆に「私」が友人に負うコミットメントも見出せる。仮に (5) のやり取りののちにも友人が公演を気に入っているかのように「私」が接し続けたならば、友人は「私」が自分の発言をまじめに受け取らないと責めることができる。この点で、「私」もまた友人の発言を受け入れたときに、友人へのコミットメントを負うのである。従って (5) の例に見られるコミットメントは相互的であり、これはギルバートの言うところの「共同コミットメント (joint commitment)」に相当する (Gilbert 1996; 2014)。ここで描かれている状況をギルバートの言葉で表現すると、(5) のようにコミュニケーションが成立したとき、「私」と友人は、友人が問題のオペラ公演をつまらないものだと思っているということへの共同コミットメントを形成しているのである。テイラーの指摘は、コミュニケーションの成功において成り立つのはこのような共同コミットメントであって、相互知識では不十分であるということだと解釈することができる。

本稿での解釈に基づくテイラーの指摘が正しいとすると、柏端はコミュニケーションの分析についての説明目標を取り違えていることになる。だがむろん、それでもなお [NNM+] がもっともらしい説明を提供できるという可能性はある。従って問題は共同コミットメントに関わるこうした現象を、[NNM+] のような話し手の意図に基づくコミュニケーションの分析によって説明することができるのかということだ。ギルバートは個人の心的態度は、たとえ相互知識のような無限に長い連言の形であったとしても、あくまで個々人のコミットメントに関わるのみで、複数のひとが形成する共同コミットメントを説明することはできないと繰り返し主張している（例えば Gilbert (1987)）。こ

れが正しければ、あくまで個人の心的態度にしか言及していない [NNM+] のような分析は不十分なものとなる。柏端が [NNM+] を堅持するのであれば、コミュニケーションの成功においては共同的コミットメントの形成までは必要とされないと論じることで自身の設定する説明目標を正当化するか、もしくは共同的コミットメントは相互知識や意図といった個人の心的態度によって分析しきることができる²²と論じることでテイラーの指摘に従って説明目標を修正したとしても問題は起きないと示す必要がある。

3.3 コミュニケーションや「メッセージ」や意図によって分析できるのか？

3.1 節ではコミュニケーションの分析が対象とする現象の画定について、3.2 節ではコミュニケーションの分析にとっての説明目標の設定について、それぞれ本書が不十分であるということを指摘した。[NNM+] が分析対象や説明目標の設定を十分なさないままにされた分析であるならば、[NNM+] は危うい地盤のうえに立っていることになる。このように地盤が危ういとしたら、そもそも私たちはなぜ [NNM+] を、あるいは広くコミュニケーションやそれに関連する「メッセージ」のような概念を話し手の意図によって分析するアプローチを採用すべきなのだろうかというさらなる疑問が生じる。こうした立場の採用には根拠を与えられていたのだろうか？

柏端の議論の進め方はこうである。「コミュニケーションとはまず何より行為なのである」(9 頁)と主張され、「どのような意図を伴っているかがどのような種類の行為であるかを左右する」(10 頁)ということを確認したうえで、「コミュニケーションはある特殊な構造をもった意図を伴う行為として特徴づけられる」(同上)と論じられる。そして重層的な意図による「メッセージ」の特徴づけが提出されることになる。

だがこの議論の流れには飛躍が含まれている。というのも、次の主張はそれぞれ異なっているのである。

1. コミュニケーションは意図を伴う行為である。
2. コミュニケーションの内容（「メッセージ」の内容）は、コミュニケーションに伴う意図の内容と対応している。
3. コミュニケーションの内容は、コミュニケーションに伴う意図の内容によって決定されている。

コミュニケーションが行為であり、どのような意図を伴っているかによってその行為の少なくともある側面が特徴づけられるというのは確かだろうが、これはせいぜいいうえの三つの主張のうち主張 1 のサポートを与えるに過ぎない。主張 2 は単にコミュニケーションには意図が伴うというだけではなく、まさにその意図の内容がコミュニケーションの内容と対応しているということまで主張しているが、これはコミュニケーションが意図を伴う行為であるという直観的に明らかな事柄からは出てこない、もっと強い主張である²²。また仮にコミュニケーションの内容とコミュニケーションに伴う意

²² 三木 (2014) ではこの主張 2 が疑わしいということを論じた。

図の内容が対応していたとしても、前者が後者に決定されるということを主張するにはさらなる議論が必要となる。しかし [NNM+] に結実する柏端の考えは、このもっとも強い主張 3 に基づいているのである。コミュニケーションが独特の種類の意図を伴う行為であるということが直観的に明らかだとしても、このことは主張 2 や主張 3 の妥当性を保証せず、従って主張 3 を前提に分析を推し進めることをサポートしはしないのである。

三つの主張のあいだには、番号の大きいものが小さいものを含意するが逆は成り立たないという関係がある。それゆえ主張 1 を正しいものと仮定すると、コミュニケーションに関して少なくとも三通りの立場を考えることができる。

- A. 主張 1 のみを認める。コミュニケーションは意図を伴う行為であるが、その内容は関連する振る舞いに関する社会的背景やそれに関する人間の認知的枠組みなどといった意図とは異なる要因から決定され、話し手の意図がコミュニケーションの内容と対応した内容を持っている必要はない。
- B. 主張 1 と 2 のみを認める。コミュニケーションは意図を伴う行為であり、かつコミュニケーションとそれの際の意図とは内容において対応していなければならない。だがコミュニケーションの内容は立場 A の場合と同様に話し手の意図とは別の要因から決定される。しかしコミュニケーションの内容に対応した内容を持つ意図を持つことがコミュニケーションという行為の成立に必要となるため、結果的にコミュニケーションと意図の内容的な対応が要請される。
- C. 三つの主張すべてを認める。意図基盤意味論の立場である。

目下のところでは立場 C が単に仮定されているだけであり、それが立場 A や立場 B よりももっともらしいと考える根拠は与えられていない^{*23}。もちろん立場 A や立場 B が実際にどのようなものとなるのか、それらに基づいて適当な理論を構築することができるのかということは、そうした立場を採用する者にこそ問われるべきであり、意図基盤意味論者が答えなければならない問題ではない。ただ、立場 C のもっともらしさは直観ではなく議論によってサポートされる必要があり、それがなければ立場 C は根拠なく当面の仮説として採用されているに過ぎないということは念頭に置いておくべきだろう。

本稿ではこれまで、[NNM+] の妥当性や、より一般的にコミュニケーションを意図によって分析する立場のもっともらしさを疑う理由を挙げてきた。そのうえでいま論じたようにそうしたアプローチが根拠を欠いているとしたら、そうした枠組みは手放しでは受け入れにくいものとなる。

^{*23} こうした問題は、意図基盤意味論の出発点であるグライスにも向けられる。グライスが意図を持ちだしたときの記述は次のようなものである（ただし「意味_{NN}する」とは「非自然的に意味する」ということであり、話し手の意味にあたる）。

最初の試みとして「 x は何かを意味_{NN}する」が真なのは発話者がそれによってある「聞き手」にある信念を引き起こそうとしているときであり、さらにその信念がどのようなものであったかを述べるのが x が何を意味_{NN} であるかを述べることでありと提案しよう。（Grice 1957, p. 217, 拙訳）

ここでは話し手の意図が意味の内容を決定すると仮定することが単に宣言されているだけであり、そのことには何の根拠も与えられていない。そして私の知る限りでは、グライス以降の論者もグライスのこの論文に言及するばかりで、そうした仮定を正当化してはいない。

3.4 心的態度とそれを記述する文の峻別は問題を解決するのか？

本節ではこれまで、柏端の分析がその対象となる現象の画定と説明目標の設定において不十分であり、また [NNM+] をもたらすような意図基盤意味論のアプローチには根拠が与えられていないということを述べてきた。ではこれらの問題がすべて解消されたとしたら、柏端の [NNM+] はもっともらしい分析となるのだろうか？ ここでは柏端の提案した心的態度に対する理解、すなわち心的態度を「世界に対する構えの一種」(60 頁)であり、「態度をもつ主体の状態」(90 頁)であるとしながら、それを記述する文は「諸態度のあいだの（合理的または因果的な）関係を、全体として適切に説明する」(91 頁) 際に用いられるとすることで態度そのものとその記述とを峻別する考え方が、[NNM+] に見られる自己言及的意図の措定に対するサポートにならないということを論じる。

まず自己言及性自体が問題であるというわけではないということを指摘しておく。というのも、サールによれば意図は一般的に自己言及的だからである (Searle 1980)。だがすでに注釈 11 で触れていたように、柏端やハーマンの分析に登場する自己言及的要素と、サールが意図の一般的な特徴だとする自己言及的要素は異なるため、サールが持ち出すような自己言及的意図を受け入れたとしても、柏端やハーマンの措定する自己言及的意図が直ちに無害となるわけではない。

サールが述べているのは、例えば手を挙げようという意図の内容は「この意図の達成によって私の手を挙げるという行為を遂行する」と記述できるというものである (Searle 1980, p. 53)。このとき「この意図」は命題的内容の省略ではなく、「この意図の達成によって私の手を挙げるという行為を遂行する」によって内容が記述されている当の意図、すなわちそのときに生じている心的出来事を指示しているものと理解することができる。従ってここで意図の記述に用いられている内容を理解するためには、「この意図」を文へと展開する必要はなく、ただそれが何を指示しているかさえわかればよい。これはちょうど、「この文を書いたのは太郎である」と書かれているときの「この文」が命題的内容の省略ではなく、単に特定の対象（当該の文のトークン）を指示しているというのと変わらない。サールの用いる自己言及的要素は、そのように理解することが可能なものである。

これに対し、[NNM+] やハーマンの分析をそのように理解することはできない。[NNM+] を再掲しよう。

NNM+ 行為者 x は、 ϕ をもたらすことによって受け手 y に ψ がもたらされることを意図しており、しかも、その意図を y が認識することによって、さらに、いま述べているこの意図自体をも y が認識することによって、 ψ がはじめて y にもたらされることをも意図している。

この言明において、自己言及的要素「いま述べているこの意図自体」は y が認識することとして表れている。そして「認識する」は標準的に理解すれば命題的態度の一種であり、その目的節は命題として特定される必要がある。それゆえ [NNM+] における「いま述べているこの意図自体」は心的出来事としての問題の意図を指示するのではなく、その内容へと展開されない限り、[NNM+] の言明中で役割を果たさないのである。それゆえ、サールの分析における自己言及的要素は無限に続く文の問題を引き起こさない解釈が可能であるのに対し、[NNM+] やハーマンの分析は必然的にそうした問題

に関わることになる。

さて、問題は無限に展開される文で記述されるような内容を持つ意図だ。ハーマンの分析に対して、ディヴィスは次のように困惑を表明している。

[ハーマンの言うような] 意図は文字通り理解不能に思える。そうした意図を持つためには、「まさにこの事態（この文全体で表現されている事態）を私が意図していると [聞き手]A が認識することで A にある反応を私は生じさせるだろう」によって表現されるような事態（ないし命題）を意図しなければならない。そうしたことを意図するということ、そうした文で表現される命題を信じたり欲したりということが何なのか私にはわからない。そうした文で表現される思考を考えることさえできない。「この文で表現される事態」は文が与えられることで初めて事態の記述となるのだから、その意義は指示対象を決定しない。それゆえ、私自身そうした意図を持っていると認識することはないし、他人にそうしたものを帰属することもできない。そうした意図を表現するひとというのも聞いたことがない。ただグライスの理論に取り組む学者がそうしたものの話をするのを聞いたことがあるだけである。（Davis 2003, p. 88, 拙訳）

ディヴィスの述べていることは頭からの拒絶に近いようにも見えるが、考慮すべき点が一つある。すなわち、[NNM+] やハーマンの分析において実際には何が意図されているのかということだ。言い換えれば、その意図の充足条件、すなわちその意図の内容を記述する文の真理条件は特定できるのかということである。[NNM+] は柏端自身が言う通り、そこで「規定される意図を具体的に語っていくとしたら、無限に続く意図内容の記述が生成される」（p. 55）内容を持つ。そうした意図の充足条件を私たちは与えることができるだろうか？ 例えばお茶を飲もうという意図の場合、その充足条件は「お茶を飲む」の真理条件をもとにして決定できる。そしてこの文の真理条件はその統語論的配置と「お茶」や「飲む」の意味から決まる。だが [NNM+] で記述されている意図はどうだろうか？ 意図内容の記述が無限に続いていく以上、そのような意図の内容を述べる際の出発点となる単位に私たちがたどり着くことはできない。ために「この意図を A に気づかせようという意図」を考えてみてほしい。この充足条件は「この意図に A が気づく」という文の真理条件によって与えられる。これはこの文の統語論的構造と、「この意図」、「気づく」の意味、「A」の指示対象といったものから決まるだろう。しかしここでの「この意図」は命題的態度の目的節を与えなければならいため、内容へと展開される必要がある。しかしそうして展開された内容には再び「この意図」が現れることになり、このステップは終わることがない。これはつまり、問題の文の真理条件を合成的に計算するための出発点にたどり着くことが永久にできないということである。それゆえ、もしも「この意図を A に気づかせようという意図」と記述される意図に充足条件を与えることができるなら、「この意図に A が気づく」という文の真理条件を決定するどこかの段階で非合成的な仕方では計算がなされることとなる。従って、もし [NNM+] によって話し手が持つ意図が記述されているとするならば、私たちは言語の合成性を常には成り立たないものと見なす必要があるだろう。逆に合成性を言語の本質と見なすならば、[NNM+] による意図の記述とされるものは、実際には有意味な表現ではないことになる。従って、心的態度そのものと文によるその記述を区別したとしても、[NNM+] が有意味ではなくそもそもいかなる心的態度も記述しているとは言えないことになり、そのような区別は [NNM+] の擁護には

つながらないということになる。

[NNM+]の合成的な解釈に関する上記の問題は、柏端が挙げる両想いの事例が、[NNM+]で記述される意図のようなものが日常的に見られるということを示す適当な例となっていないということを示唆する。柏端は次のように述べている^{*24}。

われわれがこうした種類の心の状態になりうるということ自体に何ら不思議な点はない。「両想い」または「相思相愛」といった関係をどのように定義しうるか考えてみてほしい。それらの状態がまず相互的であることはまちがいない。[……]あなたと誰かが相互に相手のことを想っていたとしても、はがゆいことに、それだけでは両想いの関係になれない。[……]両想いの関係になるには、相手もまた自分のことを想ってくれているということを互いに知らなければならない。だが、それでもまだ十分ではない。それにくわえて自分の想いが相手に伝わっているということも知っていなければならないからである。[……]そのようにして以下無限に必要な条件が挙げられることになる。(56頁)

だが両想いへのこうした定義は、[NNM+]とは合成性に関して似ていないのである。

柏端は両想いを記号的に書くと(6)のようになり、これは(7)のように単純化できると言う(57頁)。 x が y を想っているということを「 $L(x, y)$ 」で、 x が p と知っているということを「 $K_x(p)$ 」で、 x と y が両想いであることを「 $ML(x, y)$ 」で表している。

$$(6) \quad L(x, y) \& K_x(L(y, x)) \& K_x(K_y(L(x, y))) \& K_x(K_y(K_x(L(y, x)))) \& \dots$$

$$(7) \quad ML(x, y) =_{df.} L(x, y) \& K_x(ML(x, y))$$

(6)は確かに無限に続く式であり、(7)はそれを単純化した式となっている。

(6)が無限に続く文であるという点だけを取り出すなら、(6)は[NNM+]に似ているかもしれない。だが(6)に含まれる個々の連言肢は有限の長さしか持たず、(6)は単にそうした連言肢が無限に多く連なっている形をしているに過ぎない。それゆえ x と y という変項と、 L および K_x という述語の値が定まっているならば、任意の連言肢の値を合成的に計算することができる。もちろん(6)自体は無限に長いため、すべての連言肢が真であることを順番に確かめるという仕方での真理を確認することはできない。しかし偽であるときには有限回のステップでそのことを確かめることができる(一つ目の連言肢から順に、偽になる連言肢まで計算を続ければよい)。これはそもそも合成的な計算を始めることさえできなかった[NNM+]とは異なる。[NNM+]は合成的に真理条件を与えることができないため、真であることはおろか偽であることも示せず、またそれが真であったり偽であったりするということがどうということなのかも理解できないのである。このことは、[NNM+]が分析項の内部において自己言及を生じさせているのに対し、(4)にはそうした自己言及性はなく、ただ分析項に被分析項が現れているという循環的な定義となっているだけだという違いにも表れている。従って、仮に(6)のように定義される両想いに「不思議な点はない」としても、これは合成的に意味を計算で

^{*24} 些細な指摘をすれば、私は両想いに対する直観を柏端と共有していない。というのも、「AとBは本当はずっと両想いなのに、まだどちらも相手の好意には気づいてないみたい。二人とも鈍感だね」といった発話が矛盾なく可能であるという直観的な判断が私にはあるからである。

きないという [NNM+] の不思議な点とは無関係であり, [NNM+] を何らサポートしないのである.

以上の理由から, 柏端が心的態度の理解に関して提示する見解は, [NNM+] が無害であることを十分に示していない. 従って本節でこれまで述べてきた疑問が解消されたとしても, [NNM+] 自体もまた問題を残している.

4 おわりに

本稿では柏端の『コミュニケーションの哲学入門』を取り上げ, その議論を批判的に検討した. 柏端の主張は大きく次の四点に集約される.

1. コミュニケーションとは「メッセージ」を送る行為である.
2. コミュニケーションに言語使用は必要でも十分でもない.
3. コミュニケーションの本質は, 特有の自己言及的意図によって分析される非自然的意味により捉えられる.
4. コミュニケーションには思考の言語も必要でない.

柏端の議論をまとめる過程でのみ触れた事柄を除くと, 本稿で提起した批判は大きく四つである.

1. コミュニケーションから嘘やフィクションの語りを排除することには問題がある.
2. コミュニケーションが成功したときに起きる事態を柏端は十分に捉えていない.
3. コミュニケーションや「メッセージ」を, それと内容において対応する意図によって分析するという立場は十分に正当化されていない.
4. 心的態度と文によるその記述を峻別する見解は, いまのままだでは [NNM+] の無害さをサポートすることに成功していない.

もちろん柏端独自の見解に密接に関わる第四点を除くと, これらの問題点は柏端のみならず広く意図基盤意味論の論者たちに問われるべきことであるだろう. こうした問題を手掛かりに, 意図基盤意味論というアプローチの有効性を改めて考察することは, 結果的に意図基盤意味論が採用し続けられるにせよ, 他のアプローチの採用に至るにせよ, いずれにしても有益だと思われる.

柏端の著作は, 明晰な記述によって単純な主張をはっきり積み重ねていくことでなされている. だからこそ, 本稿で提示したような異論をきちんと提起することができるのである. それゆえ以上の異論が生じることは『コミュニケーションの哲学入門』の欠点ではなく, むしろその徳である. またこれらの異論は直接的には柏端の理論を退けるものではなく, 柏端の理論の展開, あるいは柏端の著作を通じてコミュニケーションの問題を思考する者の考察の発展にとって, 足掛かりとなることを期待してのものである.

References

- [1] Austin, J. L. (Urmson & Sbisà (ed.))(1962). *How to Do Things with Words (2nd Ed.)*. Harvard University Press, Cambridge. (坂本百大訳, 『言語と行為』, 勁草書房, 1978)
- [2] Bennett, J. (1976/1990). *Linguistic Behaviour*. Hackett Publishing Company, Indianapolis.
- [3] Davidson, D. (1989). What is present to the mind?. In Brandl & Gombocz (ed.), *The Mind of Donald Davidson*, Rodopi, Amsterdam. Reprinted in Davidson (2001): 53-68.
- [4] Davidson, D. (2001). *Subjective, Intersubjective, Objective*. Clarendon Press, Oxford. (清塚邦彦・柏端達也・篠原成彦訳, 『主観的, 間主観的, 客観的』, 春秋社, 2007)
- [5] Davis, W. A. (1998). *Implicature: Intention, Convention, and Principle in the Failure of Gricean Theory*. Cambridge University Press, Cambridge.
- [6] Davis, W. A. (2003). *Meaning, Expression, and Thought*. Cambridge University Press, Cambridge.
- [7] Derrida, J. (G. Graff (ed.), S. Weber (trans)) (1988). *Limited Inc*. Northwestern University Press, Evanston. (高橋哲哉・宮崎裕助・増田一夫訳, 『有限責任会社』(仏訳版を底本とする), 法政大学出版局, 2003)
- [8] Fodor, J. A. (1975). *The Language of Thought*. Harvard University Press, Cambridge.
- [9] Fodor, J. A. (2008). *LOT2: The Language of Thought Revisited*. Clarendon Press, Oxford.
- [10] Gilbert, M. (1987). Modeling collective belief. *Synthese*, 73: 185-204. Reprinted in Gilbert (1996): 195-214.
- [11] Gilbert, M. (1996). *Living Together: Rationality, Sociality, and Obligation*. Rowman & Littlefield Publishers, Inc., Lanham.
- [12] Gilbert, M. (2014). *Joint Commitment: How We Make the Social World*. Oxford University Press, Oxford.
- [13] Green, M. S. (2007). *Self-Expression*. Oxford University Press, Oxford.
- [14] Grice, H. P. (1957). Meaning. *The Philosophical Review*, 66: 377-388. Reprinted in P. Grice (1989): 213-223.
- [15] Grice, H. P. (1968). Utterer's meaning, sentence-meaning, and word-meaning. *Foundations of Language*, 4: 225-242. Reprinted in Grice (1989): 117-137.
- [16] Grice, H. P. (1969). Utterer's meaning and intentions. *The Philosophical Review*, 68: 147-177. Reprinted in Grice (1989): 86-116.
- [17] Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (ed.), *Syntax and Semantics (Vol. 3)*, Academic Press, New York. Reprinted in Grice (1989): 22-40.
- [18] Grice, H.P. (1978). Further notes on logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (ed.), *Syntax and Semantics (Vol. 9)*, Academic Press, New York. Reprinted in Grice (1989): 41-57.

- [19] Grice, P. (1989). *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press, Oxford. (清塚邦彦訳, 『論理と会話』(抄訳), 勁草書房, 1998)
- [20] Harman, G. (1974). Review of *Meaning* by Stephen R. Schiffer. *The Journal of Philosophy*, 71(7): 224-229.
- [21] Hauser, M. D., Chomsky, N. & Fitch, W. T. (2002). The faculty of language: What is it, who has it, and how did it evolve?. *Science*, 298: 1569-1579.
- [22] Lepore, E. & Stone, M. (2015). *Imagination and Convention: Distinguishing Grammar and Inference in Language*. Oxford University Press, Oxford.
- [23] Moore, G. E. (1993). Moore's paradox. In Baldwin (ed.), *G. E. Moore: Selected Writings*, Routledge, London: 207-212.
- [24] Schiffer, S. R. (1972). *Meaning*. Clarendon Press, Oxford.
- [25] Searle, J. R. (1980). The intentionality of intention and action. *Cognitive Science*, 4: 47-70.
- [26] Sperber, D. & Wilson, D. (1986/1995). *Relevance: Communication and Cognition (2nd Ed.)*. Blackwell Publishing, Oxford.
- [27] Strawson, P. F. (1964). Intention and convention in speech acts. *The Philosophical Review*, 73: 439-460. Reprinted in P. F. Strawson (1971/2004): 115-130.
- [28] Strawson, P. F. (1971/2004). *Logico-Linguistic Papers (2nd Ed.)*. Ashgate, Hants.
- [29] Taylor, C. (1980). Review of *Linguistic Behaviour* by Jonathan Bennett. *Dialogue*, 19: 290-301.
- [30] 三木那由他 (2012). 「グライスにおける語用論的プロセス: 推意に関するもう一つの誤解」. 『哲学論叢』, 39 号: 86-97.
- [31] 三木那由他 (2014). 「意図基盤意味論に基づく話者意味の分析はなぜ誤っているのか」. *Contemporary and Applied Philosophy*, 5: 1033-1051.
- [32] 三木那由他 (2015). 「心理的であり公共的である意味について」, 博士論文, 京都大学提出.

Author Information

三木那由他 (京都大学 nyt.miki@gmail.com)